

あり方の自由

先週は自由についてお話ししました。自由とやりたい放題は違う。自由には責任がある。私たちはイエス・キリストによって自由が与えられているのであるが、だからと言って罪に開き直ってやりたい放題するのではなくて、イエス・キリストを通して私たちをそのまま救ってくださった神様の恵みに応えていくためにこそ私たちの自由を使っていこうという、そんなお話をしたと思います。今日はまた違った形で自由についてお話ししたいと思います。私たちはイエス・キリストの愛に結ばれて自由である。それって具体的にどういうことなの？そんなお話をして、その自由のすばらしさについてお話をしていきたいと考えています。

さて、そんな今日は聖書の中からフィリピの信徒への手紙2：12～18をお読みいただきました。どんなことが書かれてあったかな？一緒に見ていきましょう。

このフィリピの信徒への手紙はパウロさんによって書かれたのですが、パウロさんがこの手紙を書いた時、フィリピの教会では仲違いが生じていました。それを解決するためには、皆がお互いに謙虚になってへりくだらなければなりません。そこでパウロさんは、イエス様のことを語ります。イエス様は神様と全く同じ存在であったのに人となられ、僕として人に仕えられ、ついには十字架の上ですべての人々を救うために御自分を犠牲にされました。このようにイエス様が徹底してへりくだって神様の御心に従われたのだから、私たちも同じようにへりくだり、すべての人に仕える僕となって神様の御心に従おう。そうして教会員同士心を合わせ、思いを一つにして仲違いの問題を解決しよう。そしてさらに、自分の中で生きて働き、御心を行わせてくださる神様のその働きに自らをお委ねして、イエス様が成し遂げてくださった救いを完全なものにしようではないか。パウロさんは今日の聖書箇所の中でそのように呼び掛けています。

教会が内部で争っているのは決して健全な姿ではない。教会の頭であられるイエス

様にふさわしく、一人ひとりがへりくだって謙遜を身に着ける時、教会は本当に良い証しをこの世に向かってすることができるようになる。これこそ教会の本当にあるべき姿なんだよ。そのようにして皆が世の光であられるイエス様から光をいただき、「世の光」として、また「非のうちどころのない神の子」としてこのくらい世の中に光り輝くなら、私は自分がしてきたことが無駄ではなかったと終わりの日に神様の前で誇ることができる。それで神様の愛と福音を宣べ伝えるために死ぬことになったとしても、私は喜びます。その時はあなたがたも私と一緒に喜んでください。パウロさんはそう訴えます。

これが今日の聖書個所で、パウロさんがどれほど熱心に自分が建てた教会のために心を砕いていたかがよく分かることだと思います。その中でも、私は「何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい」というパウロさんの言葉が印象に残りました。教会の中で仲たがいをしていたら、不平も理屈も言いたくなりますよね。でもそれを言わずに、神様の御心を行いなさい。御心に生きなさいとパウロさんは言います。それって、人間的な感情に流されずに御心を行うことができること、御心に生きることができること、それこそがキリスト者のすばらしい自由なんだよと教えてくれているのではないのでしょうか。

最近片柳弘史さんというカトリックの神父さんのお話を聞く機会がありまして、その方が『こころの深呼吸』という本の中でこんな言葉を語っています。『『好き』というのは、相手が自分にとって好ましい限り、その人と一緒にいるということ、『愛する』というのは、相手が好ましさをすべて失ったとしても、その人がその人である限り寄り添い続けるということです。』

片柳神父が語っているように、私たちの愛は「好き」にとどまりがちです。色々と愛に条件を付けたがる。自分に好ましいことをしてくれるなら愛するけれども、嫌なことをしてくるなら愛さない。攻撃する。人間的な感情に流されればそうなります。けれども、愛は感情ではなく、意志です。「好き」、「嫌い」という感情に流されるので

はなく、何よりも神様が私たちのことを、罪人であるにもかかわらず愛してくださったのだから、私たちもそうしようという意志の力で御心を行っていく。御心に生きていく。それが愛なのです。

人間的な感情に従えば不平や理屈を言いたくなる。それどころか相手を攻撃したくなる。しかしそれに流されずに神様の御心を行うことができること、御心に生きることができること、それこそが本当に自由であるということなのではないでしょうか。

また、それはなにも愛に限ったことではありません。私たちは誰もが、周囲の人や様々な環境という条件のもとで生きていかざるを得ないし、病気や災難、不幸といった思わぬ条件に出遭ってしまうことだってあります。それらの条件と闘ってそれらを変えていくこと、排除していくことも大切です。でもそれができない時、それらの条件に対して自分がなおいかにあるか、それらをどのように受け止めていくかをキリスト者として考えたいと思うのです。

このことに関連して、ヴィクトール・フランクルという人が人間の自由についてこんな言葉を語っています。「人間の自由というのは、諸条件からの自由ではなくて、これら諸条件に対して、自分のあり方を決めていく自由である。」フランクルがこう言うように、与えられた条件をどう受け止め、自分はどうありたいか、それを決める自由が人間にはあります。どうしようもない不幸な境遇の中で、「自分は不幸だ」とただ不平や理屈を言って下を向いて生きていくこともできる。しかしそのような中であえて神様の御心を尋ね求め、前向きに御心に生きていくことも私たちは選ぶことができるのです。渡辺和子さんという方が、「自由人とは、自分の幸せも不幸せも自分の心で決められる人」だと言っていました。その自由を教えるのがリベラル・アーツ教育だと。

他人や境遇に自分の幸・不幸を決められるのではなくて、決して私たちをお見捨てにならない神様のもと、それらは自分で決めていくのだという厳しさ、喜びを持って生きていく。それこそがキリスト者の自由だということを改めて心に刻みましょう。

私たちは皆、イエス・キリストの愛に結ばれて自由です。どんな時もその自由で、神様の御心を選び取っていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——